

人間学部 平成 30 年度前期末

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

本報告書は、平成 30 年度前期に開講された科目の内、学生による授業評価が実施された 109 科目についてまとめたものである。授業評価の各項目の平均得点および「全体」の平均得点について検討した。また、担当者各自が個別に設定する質問項目の評価点については、各科目間で比較が不可能であるため、本報告書では扱わない。

(1) 共通教養科目

回答のあった共通教養科目に関する授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 1（心理学科 19 科目）、および図 2（コミュニケーション学科 17 科目）にそれぞれ示した。図 1 に示された心理学科の学生の延べ人数は 626 名で、各学年それぞれ 1 年生=486 名、2 年=115 名、3 年=25 名であった。また、図 2 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 497 名で、各学年それぞれ 1 年=344 名、2 年=125 名、3 年=15 名、4 年=13 名であった。前年度までと同様、該当の単位をそれまでの学年で既に修得可能なことから、両学科ともに 3、4 年生の受講数が少なかった。心理学科では、2 年については昨年度とよりやや高い評価となり、1 年は昨年度と同程度であった。一方でコミュニケーション学科では、昨年度と同様、2 年生の評価が 1 年より低くなる傾向が見られた。1 年は昨年度と同様に高いため、2 年の評価が低くなっている理由について検討する必要がある。

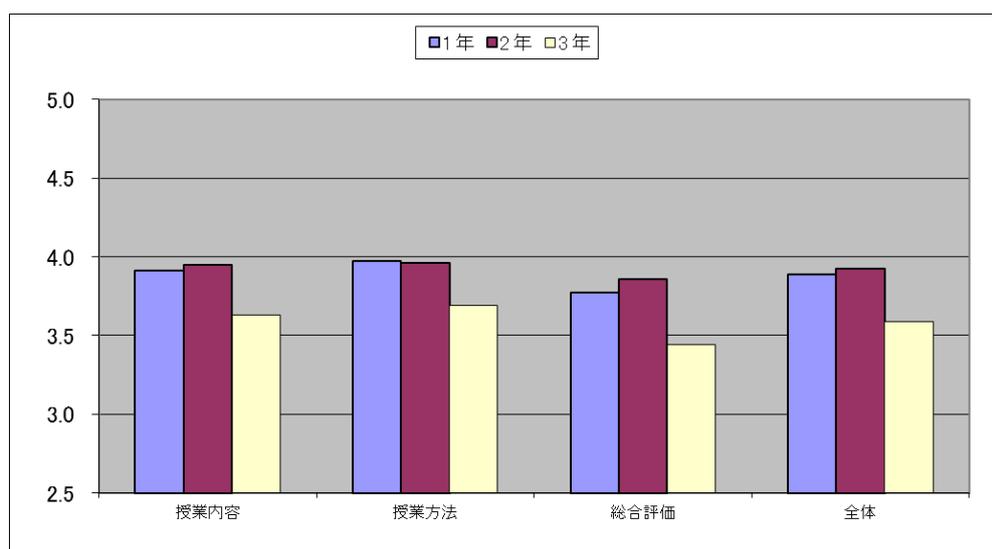


図 1 心理学科の共通教養科目に関する授業評価点

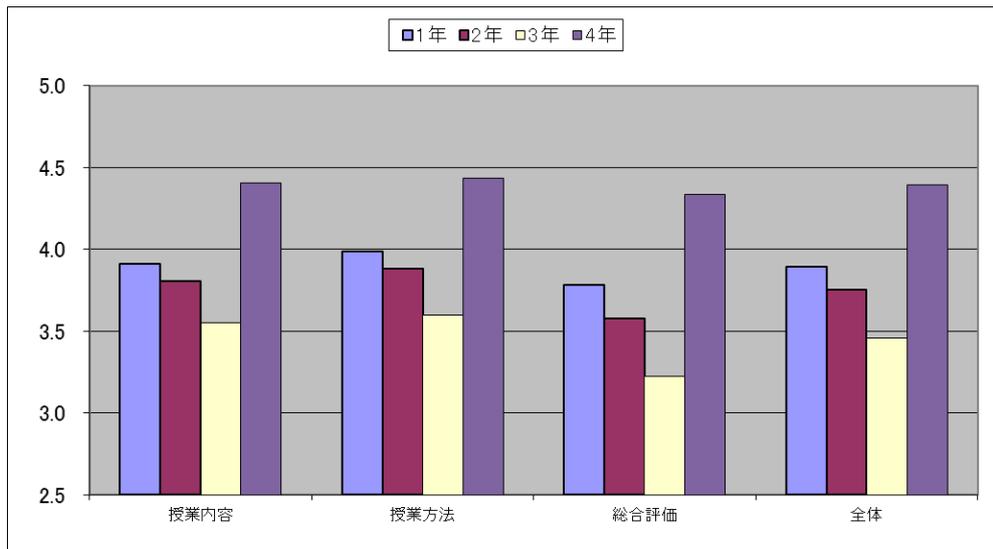


図2 コミュニケーション学科の共通教養科目に関する授業評価点

(2) 共通語学科目

回答のあった共通科目における語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図3（心理学科12科目）、および図4（コミュニケーション学科12科目）にそれぞれ示した。図3に示された心理学科の学生の延べ人数は199名で、各学年それぞれ1年=121名、2年=78名であった。また、図4に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は214名で、各学年それぞれ1年=105名、2年=96名、3年=13名であった。

心理学科においては、1年は4点前後で高い評価であり、2年は1年より低いものの3.8点程度と昨年度より高く評価されていた。一方で、コミュニケーション学科においては、1年より2年の方が全体的な評価が高かった。特に授業方法が両学年とも昨年度より若干高くなっており、授業方法の改善による影響があったと言えよう。

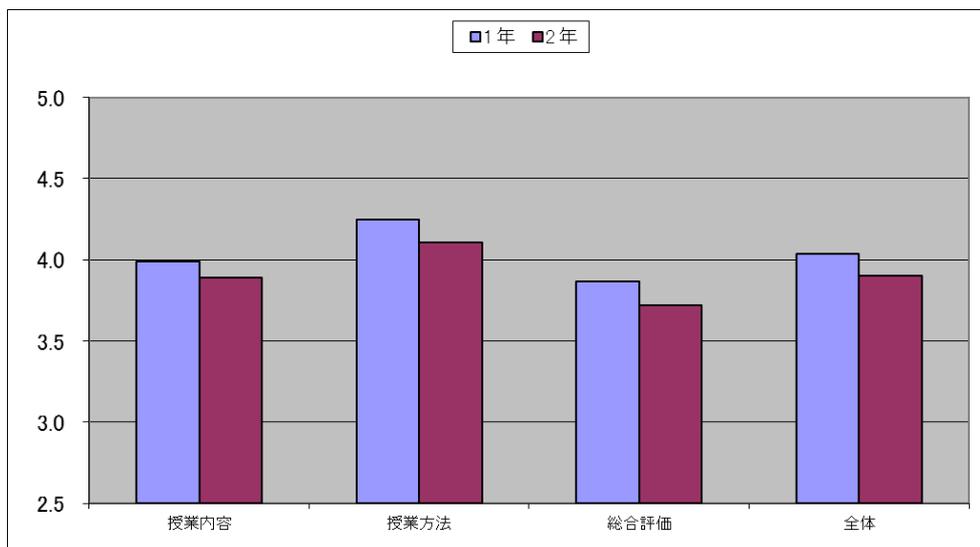


図3 心理学科の共通語学科目に関する授業評価点

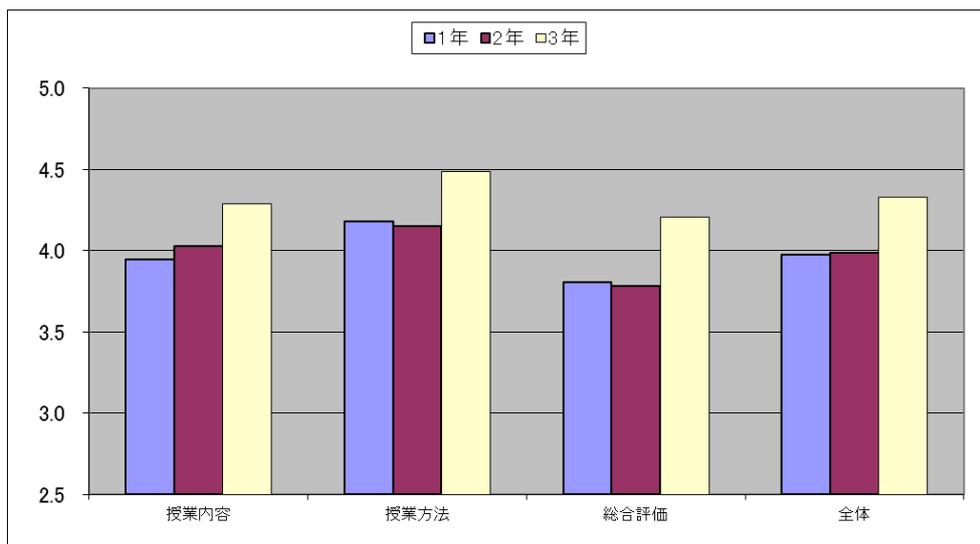


図4 コミュニケーション学科の共通語学科目に関する授業評価点

(3) 専門科目

各学科の専門科目（心理学科 27 科目、コミュニケーション学科 49 科目）の授業評価点について、学科ごとにまとめたものを図 5（心理学科）、および図 6（コミュニケーション学科）にそれぞれ示した。図 5 に示された心理学科の学生の延べ人数は 1345 名で、各学年それぞれ 1 年＝244 名、2 年＝439 名、3 年＝590 名、4 年＝72 名であった。また、図 6 に示されたコミュニケーション学科の延べ人数は 1216 名で、各学年それぞれ 1 年＝418 名、2 年＝428 名、3 年＝293 名、4 年＝77 名であった。

心理学科において、1 年の評価点は他学年に比べて総じて高かった。一方で、昨年度は 3・4 年の評価点が 1・2 年に比べて顕著に高かったが、本年度はそのような傾向は見られなかった。コミュニケーション学科においては、昨年度は 3 年と 4 年の評価点は高く 1 年と 2 年の評価点は低い傾向が示されたが、本年度はその傾向が小さくなった。一方で、どの項目においても 2 年の評価点が最も低いことについては、その理由について検討を必要とすると言える。

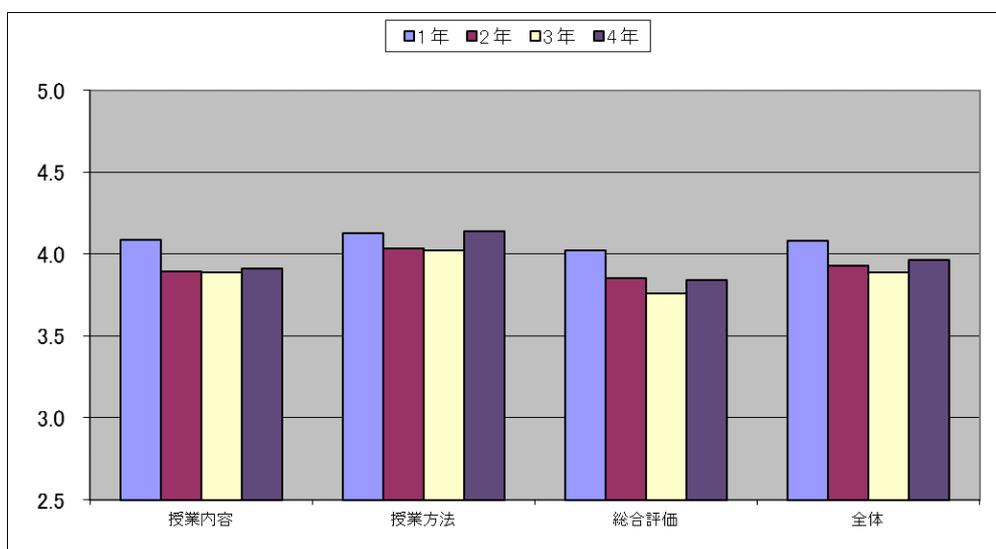


図5 心理学科の専門科目に関する授業評価点

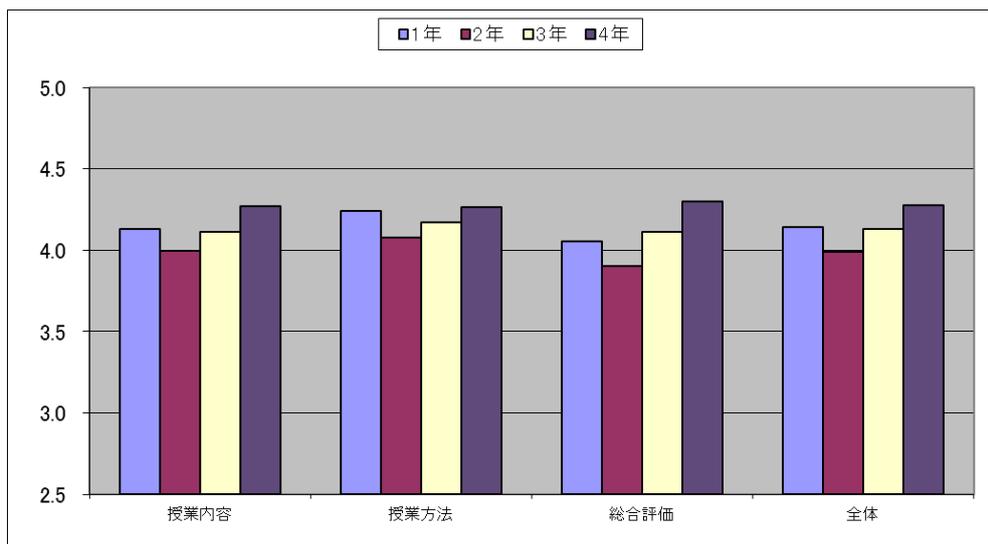


図6 コミュニケーション学科の専門科目に関する授業評価点

(4) 共通科目と専門科目の比較

本節以降7節まででは、科目の履修形態や、教室環境など、受講生の授業意欲、態度などに影響を与えると考えられる要因について、授業評価における評価点の平均値および標準偏差を指標とした比較検討を行った。本報告書で取り上げた具体的な要因は、科目の履修形態（共通科目と専門科目、必修科目と選択科目）、科目の履修者であった。本節以降の図の作成に利用した調査対象総科目数は97科目であったが、学部共通科目12科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、学科別の評価点の平均値および標準偏差を求めた関係上、調査対象から除いた。

図7は履修形態ごと（共通科目と専門科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した共通科目および専門科目の数は、心理学科ではそれぞれ15、22科目、コミュニケーション学科では、15、45科目であった。

例年、両学科とも共通科目より専門科目が高い傾向が見られるが、本年度の心理学科では共通科目に関する評価点が上昇し、履修形態による違いはほとんど見られなかった。一方、コミュニケーション学科では、昨年と同様、専門科目の方が高い評価が得られていると言える。

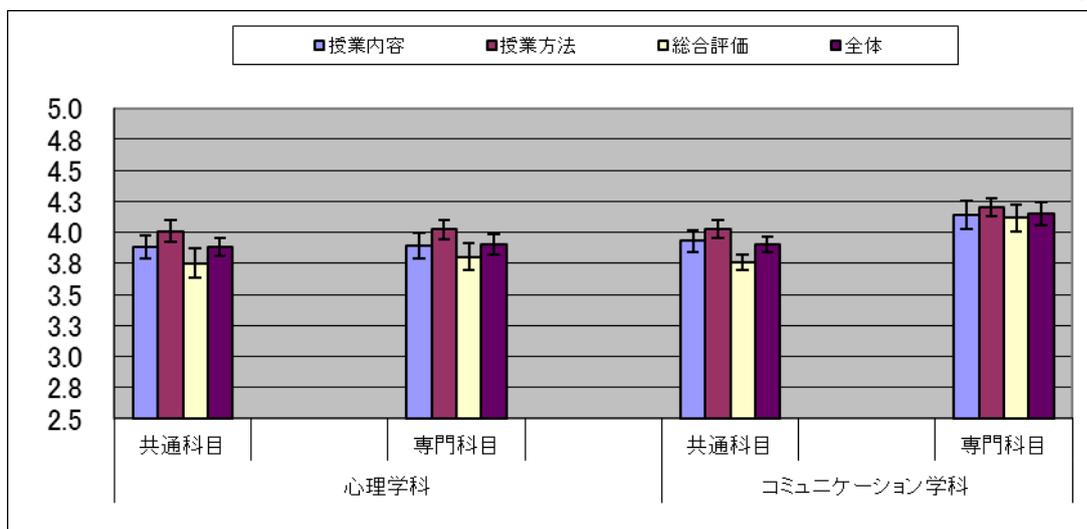


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)

(5) 必修科目と選択科目の比較

図8は別の履修形態ごと（必修科目と選択科目）の評価点を学科ごとに示したものである。分類した必修科目および選択科目の数は、心理学科ではそれぞれ12、25科目、コミュニケーション学科では、15、45科目であった。昨年度は両学科ともに選択科目の評価の方が高い傾向にあったが、本年度は心理学科では必修科目の評価点が上昇し、大きな違いは見られなかった。コミュニケーション学科においても、選択科目の評価点がやや高いものの、必修科目の評価点が上昇し、その差は縮まっている。

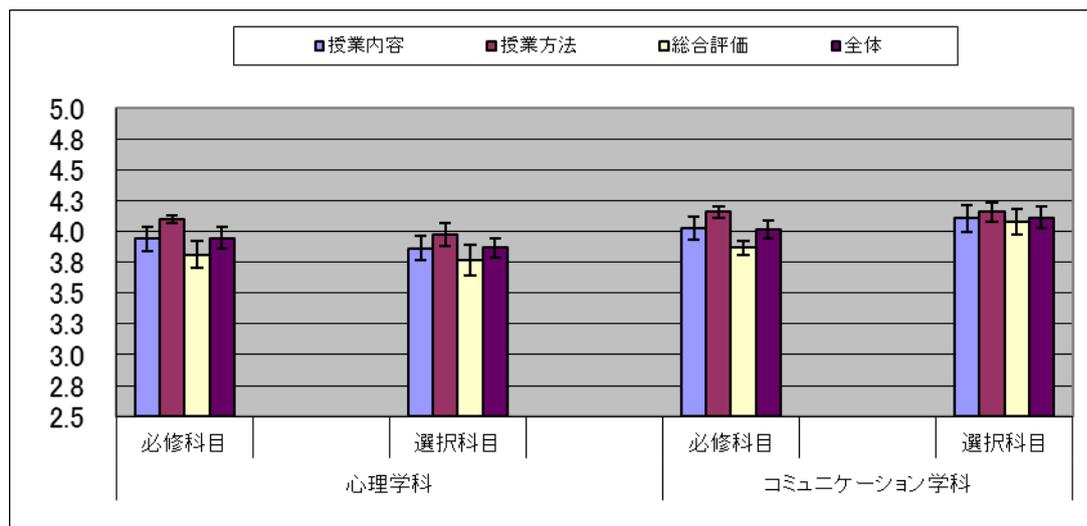


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点（±SD）

(6) 科目の履修者数による比較

図9は履修者数（履修者が40名未満の科目と40名以上の科目）で分類した科目別の評価点を学科ごとに示したものである。なお、40名未満の科目には、演習形式の授業も含まれている。

分類した履修者が40名未満の科目および40名以上の科目の数は、心理学科ではそれぞれ14科目、23科目、コミュニケーション学科では、39科目、21科目であった。

心理学科は、昨年度は40名未満の評価点が顕著に高い傾向がみられたが、本年度は履修者数による違いはほとんど見られなかった。一方、コミュニケーション学科では、本年度も40名未満の科目の評価点が高い傾向であったが、昨年よりその差が解消されている。その理由としては、コミュニケーションの40名未満の科目は昨年度に比べて12科目少なく、40名以上の科目は9科目多いことが考えられる。

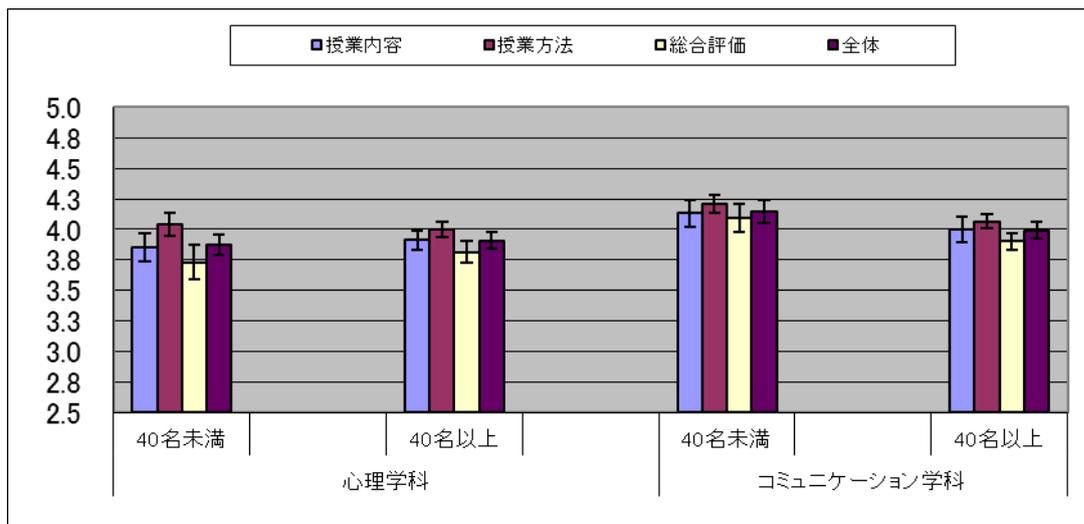


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

次に、各授業科目の履修者数と「全体」の評価点との関連について、学科ごとに散布図と相関係数で示したのが、図10（心理学科）と図11（コミュニケーション学科）である。

心理学科ではほとんど相関は見られなかった（心理学科 $r = 0.09$ 、昨年度 $r = -0.22$ ）が、コミュニケーション学科では、昨年度同様に弱い負の相関（ $r = -0.35$ 、昨年度 $r = -0.38$ ）が見られた。

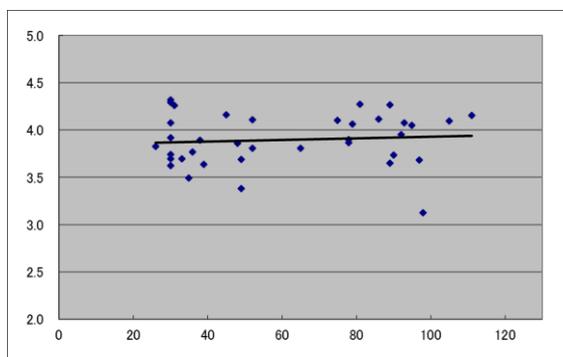


図10 心理学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = 0.09$ ($n=37$)

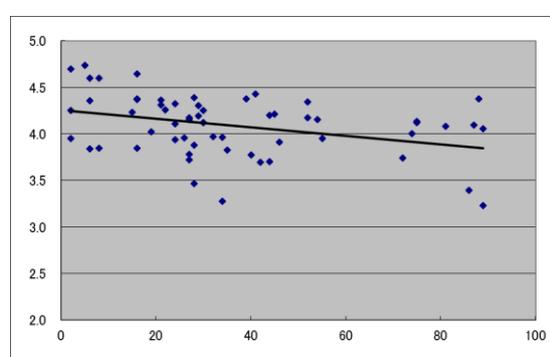


図11 コミュニケーション学科 履修者数（横軸）と授業評価点（縦軸）との相関
 $r = -0.35$ ($n=60$)

(7) 回収率

共通教養科目、共通語学科目および専門科目それぞれの授業評価アンケートの回収率を学科ごとに算出したものを図 12 に示した。それぞれの科目数は心理学科が 10、5、22 科目、コミュニケーション学科が 9、6、45 科目であった。両学科ともにすべての科目において回収率は概ね 80% を上回っており、高い回収率が今年度も維持されていることが示された。

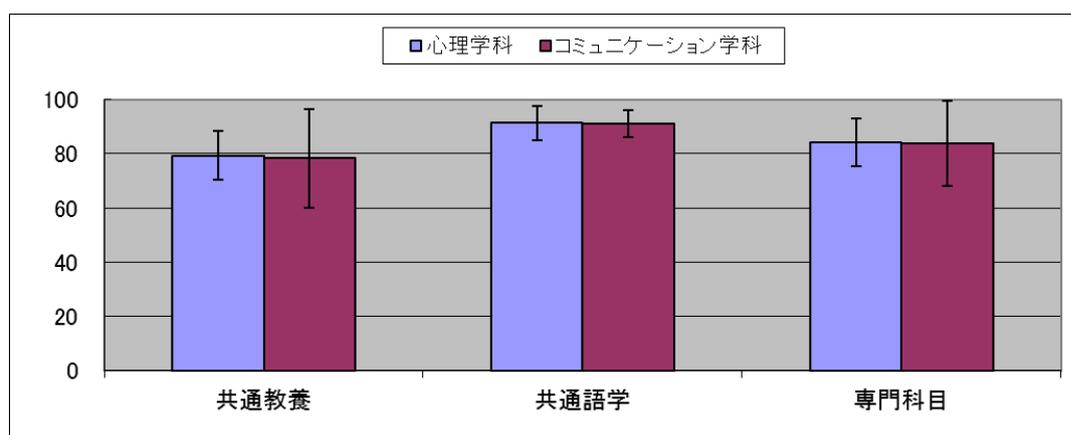


図 12 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

(8) 学修時間と学修行動

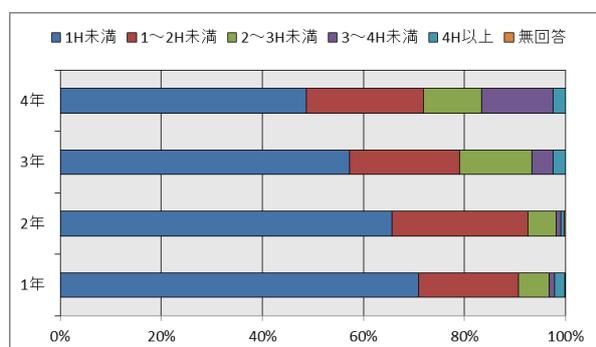


図 13 心理学科の授業外での学修時間

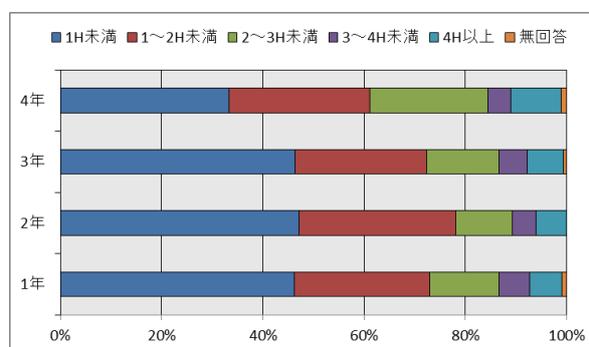


図 14 コミュニケーション学科の授業外での学修時間

各科目の授業時間以外での学修時間に関する項目について、学年別・学科ごとにまとめたものを図 13 および図 14 に示した。授業時間以外の学修時間とは、その授業に関する予習・復習に該当する。これによると、授業時間以外でその科目に関する学修時間が 1h 未満の学生が両学科どの学年においても大きな割合を占めており、これらの傾向は昨年と同様である。ただし、コミュニケーション学科の 2~4 年は昨年度より学修時間が減少しており、この原因について検討の必要があるだろう。いずれの学科、学年においても学修時間が多いとは言えず、今後授業外での学修時間についてどのようなことをすべきであるのか、授業内での指導やシラバスなどによる課題の指示など対策が必要であると思われる。

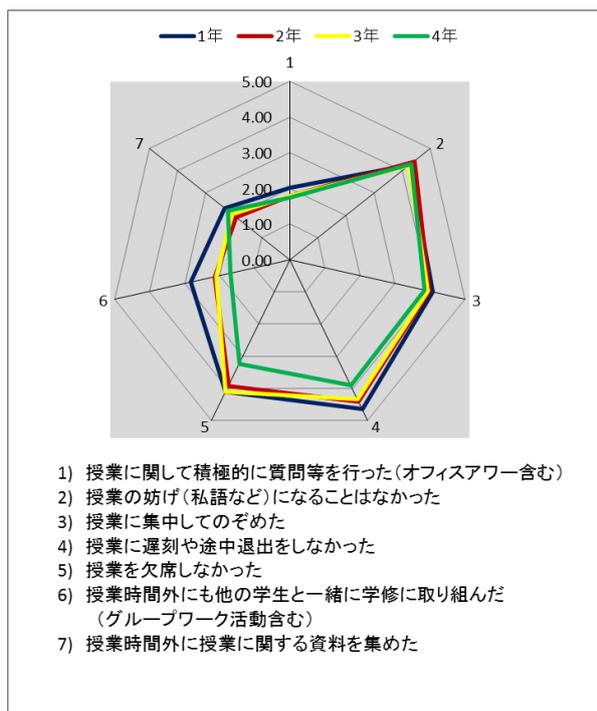


図 15 心理学科の学修行動

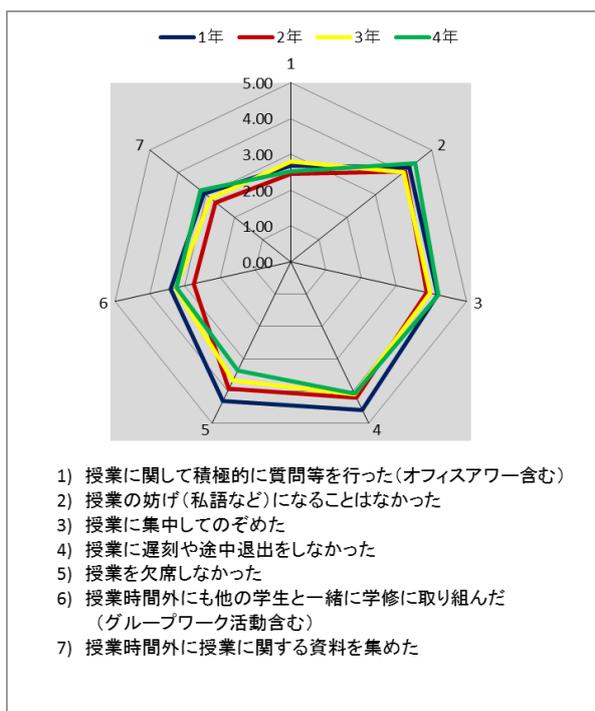


図 16 コミュニケーション学科の学修行動

各科目の学修行動における自己評価に関して、学科別にまとめたものを図 15 および図 16 に示した。両学科とも、4 年生を除き、授業時間内での学修行動に関する評価は非常に高くなっており、まじめに授業に取り組んでいる姿勢が伺える。また、授業に関して質問をした、授業時間外にも他の学生と一緒に学修に取り組んだ、授業外に授業に関する資料を集めたなど授業時間以外での学修行動（質問 1、6、7）は昨年度に続き両学科ともに低く、特に心理学科では顕著である。レポート課題の提出、グループで実施される演習など、資料を集めることやグループワーク活動などを授業時間以外で取り組むことが求められているはずであるが、行動に移されていない様子が示唆された結果となった。今後さらに課題がどのように遂行されているかの確認や授業外での学修方法についての具体的な指導、シラバスでの具体的指示といった対応が必要であると思われる。

人間生活学部 平成 30 年度前期末

授業評価アンケート調査、学修時間等に関する報告

はじめに

平成 30 年度前期の開講科目（133 科目）につき、学生に対して実施した授業評価アンケートの結果を整理する。分析の対象としたアンケート項目は、学科及び学年を問う 2 項目、授業及び学修に関する 18 項目（評価基準は 1～5 点）の計 20 項目で構成されている。内、授業及び学修に関する計 18 項目の設問を、以下の分類①～⑤の設問群にまとめ、各値を算出した。

- 設問群①：「授業内容」 4 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問群②：「授業方法」 3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問群③：「総合評価」 3 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点
- 設問④：「学修時間」 1 項目（1h 未満、2h 未満、3h 未満、4h 未満、5h 以上）の比
- 設問群⑤：「学修行動」 7 項目それぞれの平均点

これらを学科、学年、共通科目、専門科目などの観点から算出し、図示した。なお、設問群①～③は「全体」として 10 項目の点数合計に対する 1 項目あたりの平均点を算出している。また、他の代表値を用いた方が好ましいと考えられるが今回は平均値を利用し、特に解析も実施していないため、あくまで結果の提示に留めることとする。縦断的な理解のために昨年と比較する場合は、「平成 29 年度仁愛大学 FD 推進活動報告書」を御覧ください。

（1）共通教養科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において 10 科目から回答を得た（図 1 参照）。回答者が 10 名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1 年生が 296 名、2 年生が 45 名であった。

授業に対する評価は、1 年生では全ての項目「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」で、「平均点数 4.0 点以上」であった。

共通教養科目数=10科目

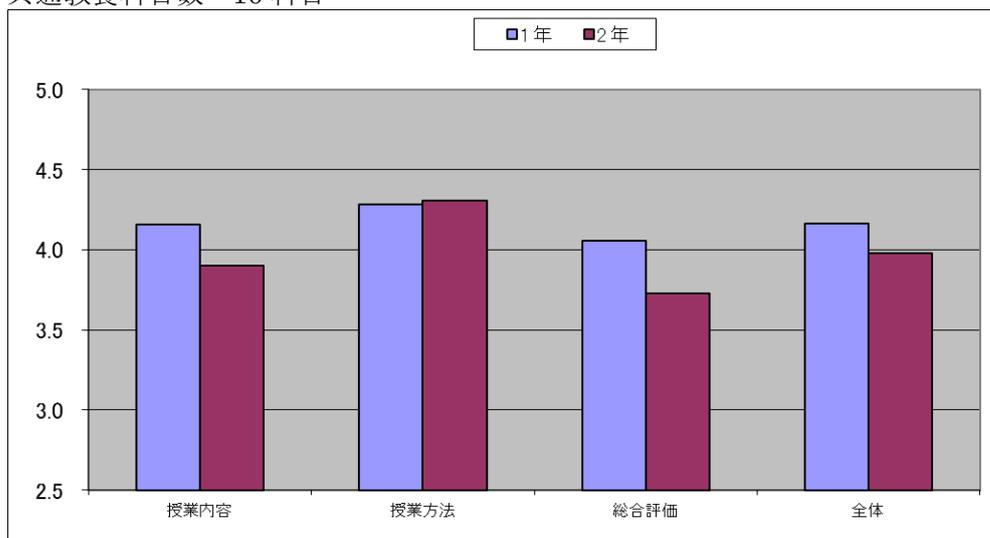


図1 健康栄養学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=296名、2年=45名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通教養科目（仏教関係、人間学関係、生活と環境関係、情報関係）において11科目から回答を得た（図2参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が369名、2年生が29名、3年生が13名であった。

授業に対する評価は、全学年で全ての項目「授業内容」、「授業方法」、「総合評価」、「全体」が「平均点数3.5点以上」であった。

共通教養科目数=11科目

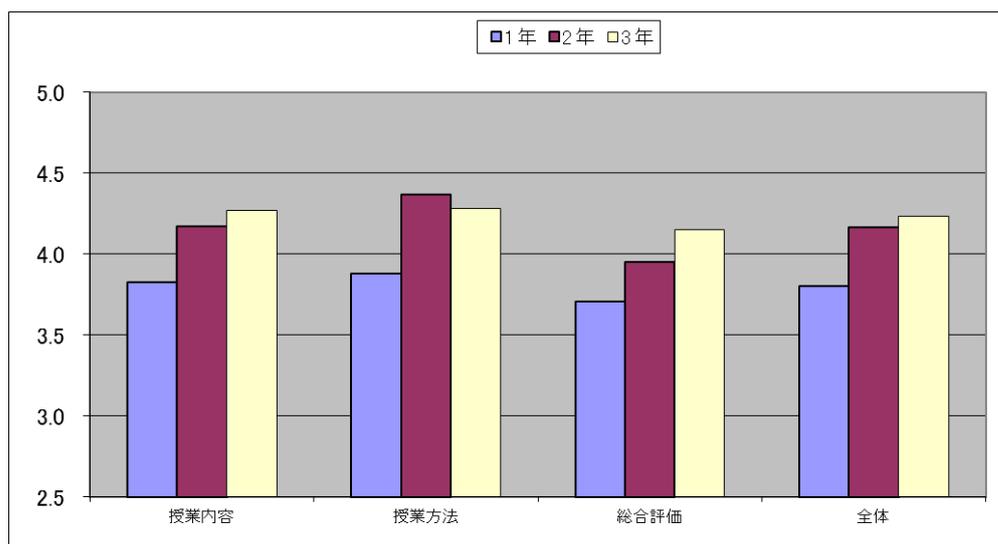


図2 子ども教育学科の共通教養科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=369名、2年=29名、3年=13名

(2) 共通語学系科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において8科目から回答を得た（図3参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が140名、2年生が29名であった。

平均点数は、1年生で4.0点程度、2年生で4.5点程度であった。

共通語学科目数=8科目

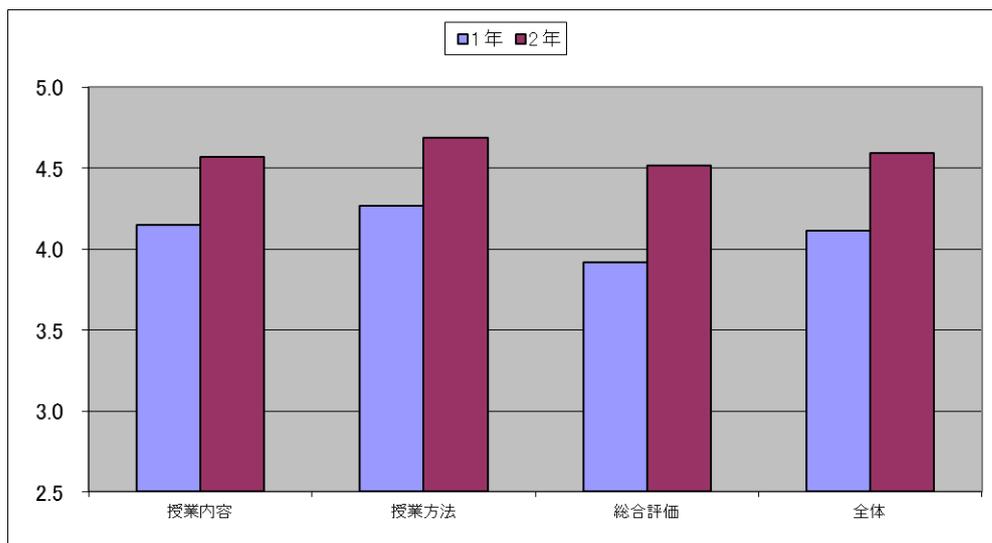


図3 健康栄養学科の共通語学科目に関する授業評価点

延べ人数 1年=140名、2年=29名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する共通語学科目（英語、フランス語、ドイツ語、中国語）において8科目から回答を得た（図4参照）。回答者が10名以下の学年は除外した。延べ回答人数は、1年生が125名、2年生が22名であった。

平均点数は、1,2年生ともに4.0点程度であった。

共通語学科科目数=8科目

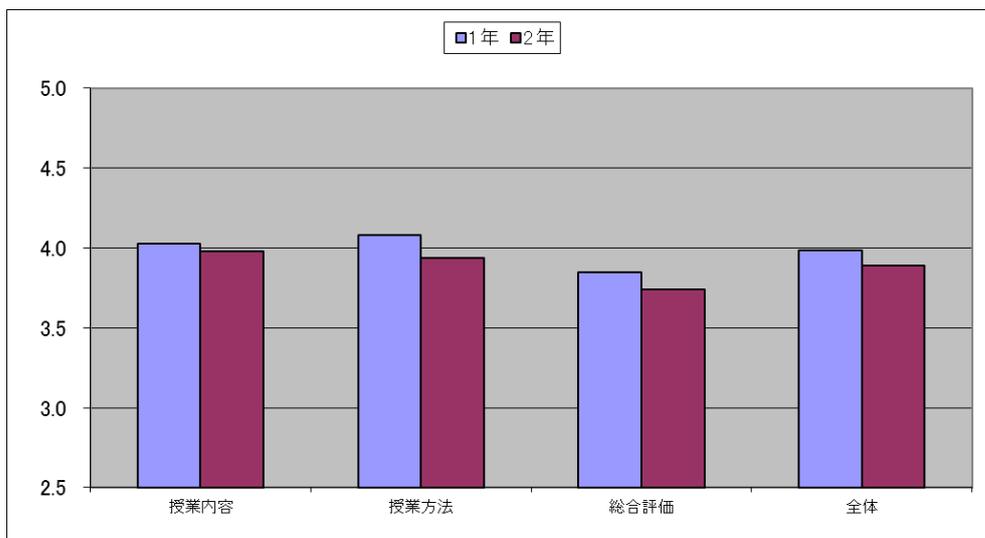


図4 子ども教育学科の共通語学科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=125名、2年=22名

(3) 専門科目

[健康栄養学科]

健康栄養学科学生が受講する専門科目において60科目から回答を得た(図5参照)。延べ回答人数は、1年生が646名、2年生が847名、3年生が454名、4年生が25名であった。いずれの設問群においても、評価点は、1、2および4年生で4.0点程度、3年生で3.7点程度であった。

健康栄養学科専門科目数=60科目

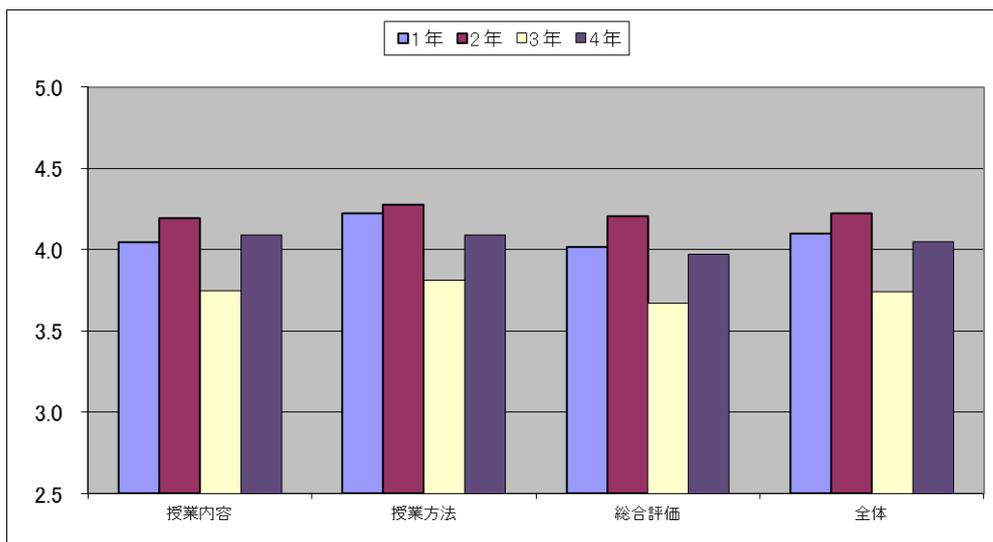


図5 健康栄養学科の専門科目に関する授業評価点
延べ人数 1年=646名、2年=847名、3年=454名、4年=25名

[子ども教育学科]

子ども教育学科学生が受講する専門科目において、53科目から回答を得た（図6）。述べ回答人数は、1年生が662名、2年生が562名、3年生が458名であった。

1、2、3年生は、すべての設問群においてその評価平均点は4.0点以上であった。

子ども教育学科専門科目数=53科目

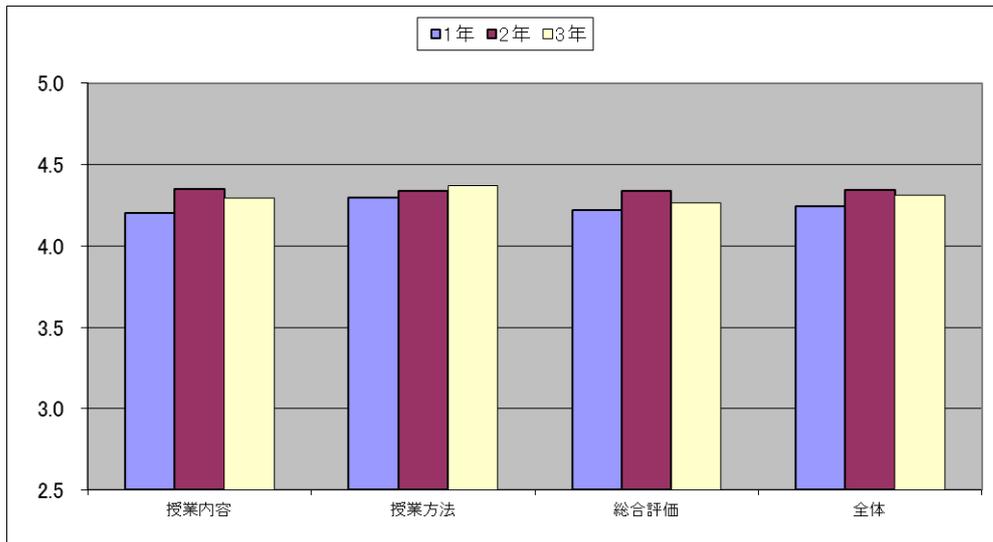


図6 子ども教育学科の専門科目に関する授業評価点
述べ人数 1年=662名、2年=562名、3年=458名

(4) 科目の種類毎による比較

科目を以下の3つの観点から比較した。これらの観点は、授業に対する学生の意識の高さが授業評価の差異へ大きく影響すると考えられる。

- ・ 共通科目と専門科目
- ・ 必修科目と選択科目
- ・ 受講生が40名未満の科目と40名以上の科目

[共通科目と専門科目の比較]

図7は、共通科目と専門科目について対象学生を学科別に集計したものである。調査対象総科目数は124科目である。なお、学部共通科目9科目は両学科の学生がほぼ半数ずつ履修しているため、調査対象から除いている。

健康栄養学科では、共通科目と専門科目の各設問群の評価平均値はほぼ同じ値と同じ傾向を示した。昨年度と比較しても、共通科目・専門科目共に各設問群がほぼ同じ値を示している。

子ども教育学科では、昨年度と同様の傾向で、すべての群において共通科目より専門科目の方が高い値となった。

以下の図からの調査対象総科目数=124 科目

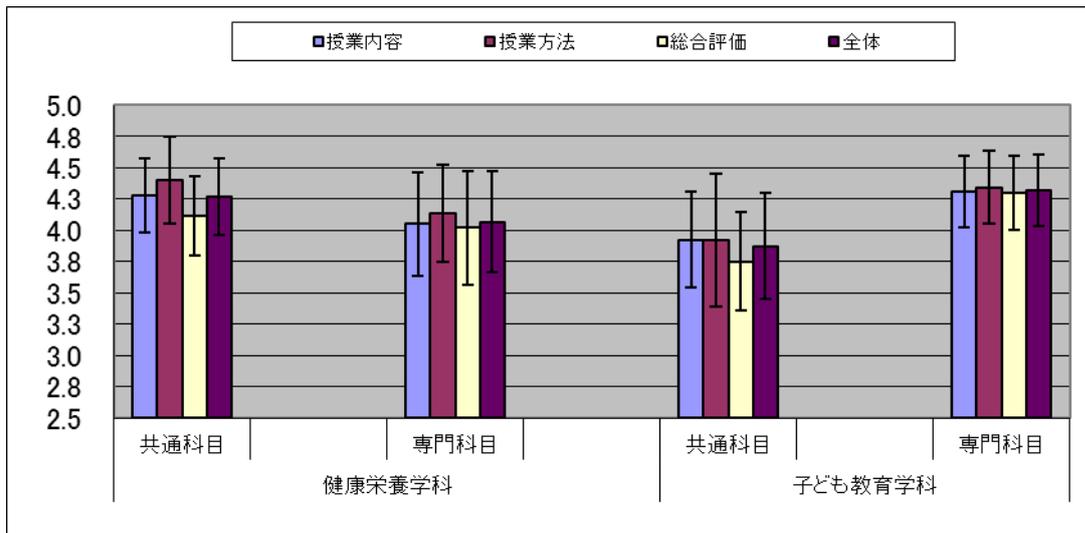


図7 共通科目と専門科目別の平均授業評価点 (±SD)
 共通科目と専門科目数は、健康栄養学科で8、56科目、
 子ども教育学科で9、51科目

[必修科目と選択科目の比較]

図8は、必修科目と選択科目について、対象学生を学科別に集計したものである。総科目数は119科目である。

健康栄養学科では、評価平均点は、必修科目4.0点程度、選択科目4.2点程度であった。

子ども教育学科では、評価平均点は、必修科目4.0点程度、選択科目4.3点程度であった。

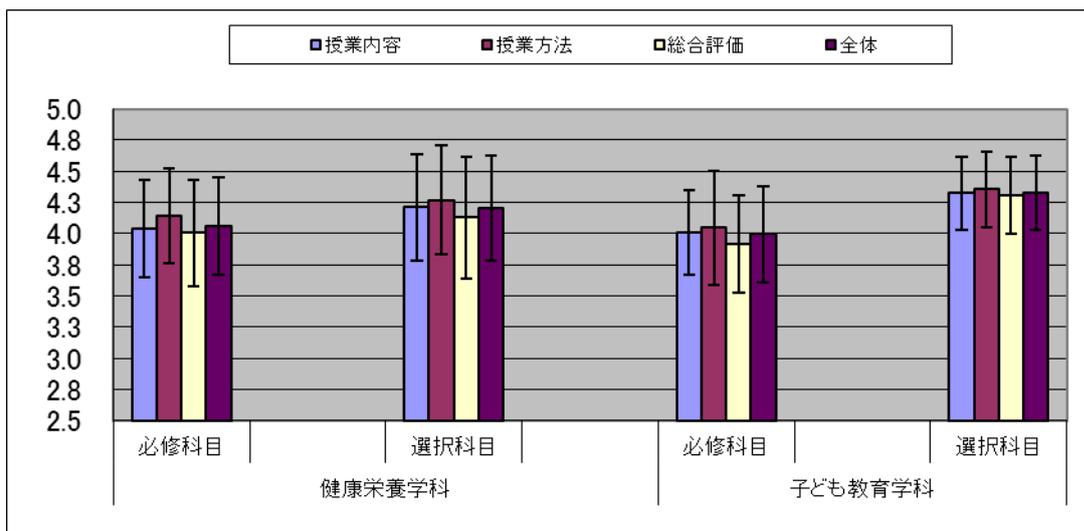


図8 必修科目と選択科目別の平均授業評価点 (±SD)
 必修科目と選択科目数は、健康栄養学科で49、15科目、
 子ども教育学科で14、46科目

[受講生数による比較]

図9は、受講生が40名未満と以上で学科別に各項目について集計したものである。総科目数は124科目である。

健康栄養学科で評価平均点は、40名未満および以上で4.0点程度であった。

子ども教育学科で評価平均点は、40名未満で4.3点程度、40名以上で4.2点程度であった。

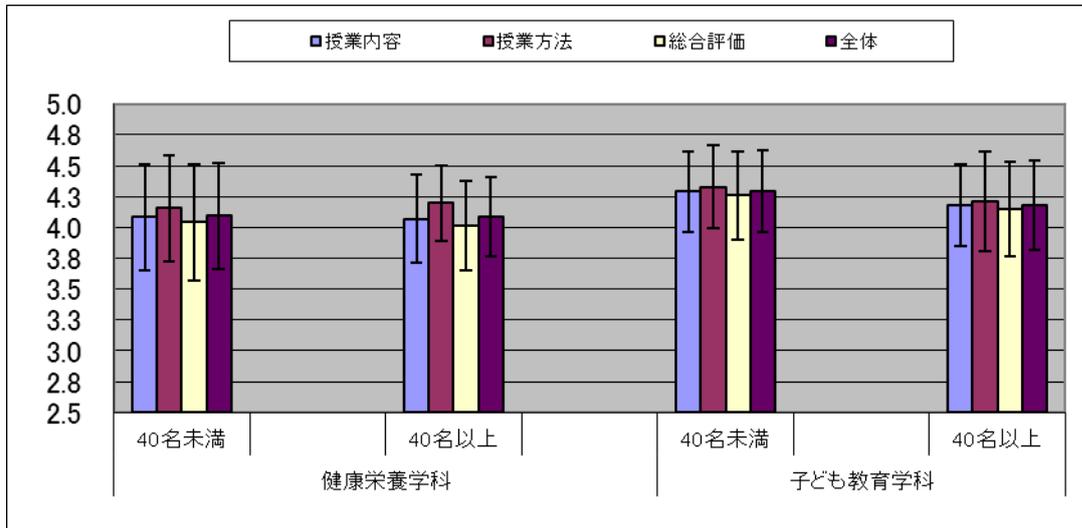


図9 受講生数による各科目の平均授業評価点 (±SD)

40名未満、40名以上の科目数は、健康栄養学科で45、19科目、子ども教育学科で37、23科目

[各科目の回収率]

共通教養科目、共通語学科目および専門科目における授業評価アンケート回収率の平均を学科ごとに算出した結果を図10に示した。それぞれの科目数は、健康栄養学科が4、4、56科目、子ども教育学科が5、4、51科目であった。それぞれ分類された科目種別における回収率の平均は両学科とも90%を上回っていた。

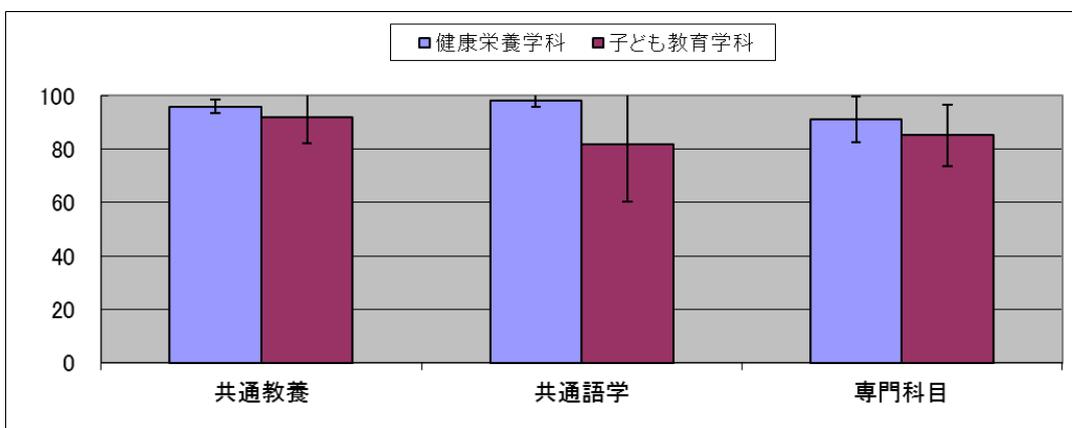


図10 各科目の平均回収率 (±SD) (%)

それぞれの科目数は、健康栄養学科で4、4、56科目、子ども教育学科で5、4、51科目

[科目個々の受講者数と評価点との関係]

図 11～13 は、学部全体および各学科での、受講者数と評価点との相関をみるために作成した散布図である。全体の相関が $r=-0.12$ であった。学科別にみると健康栄養学科は $r=-0.05$ 、子ども教育学科は $r=-0.08$ であった。

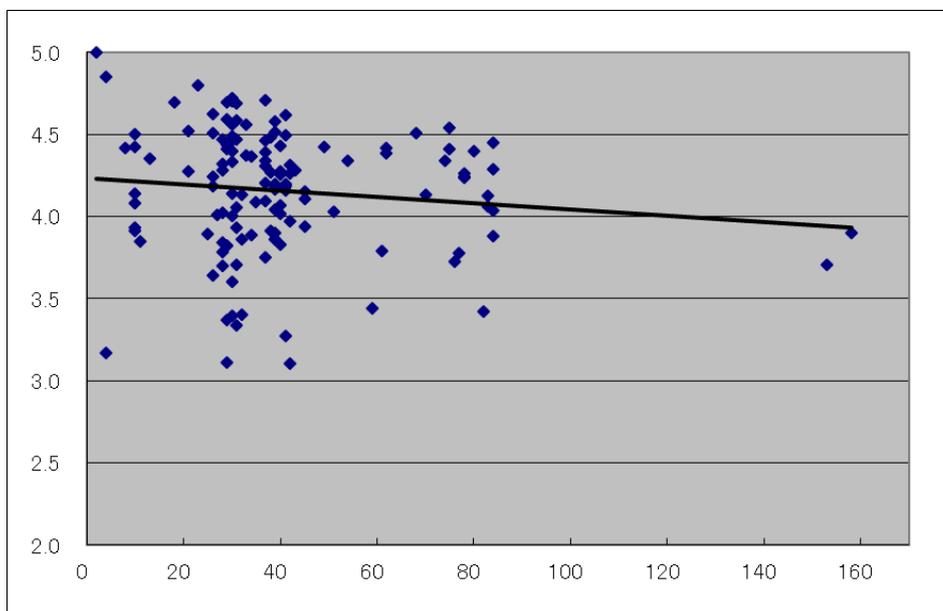


図 1 1 人間生活学部 履修者数 (横軸) と授業評価点 (縦軸) との相関
 $r = -0.12$ (n=133)

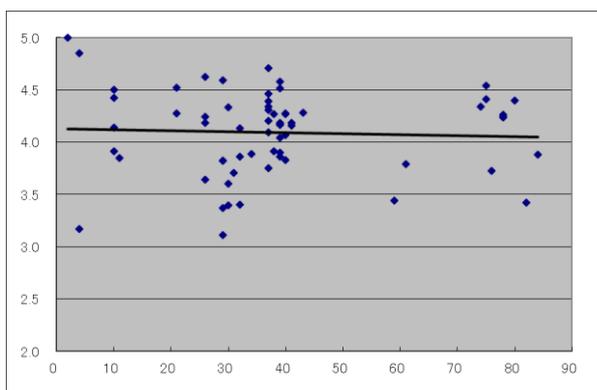


図 1 2 健康栄養学科
 $r = -0.05$ (n=64)

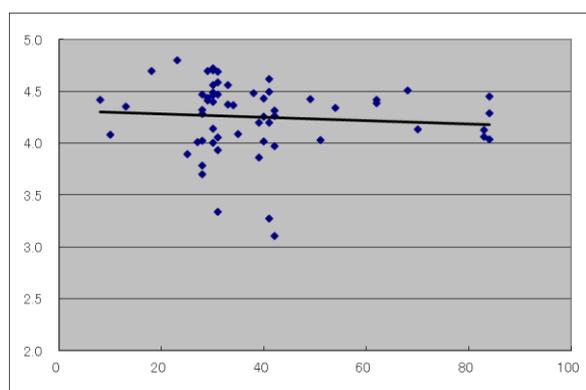


図 1 3 子ども教育学科
 $r = -0.08$ (n=60)

学外での学修時間

[健康栄養学科]

図 14 は、健康栄養学科における授業外での学修時間を集計したものである。延べ回答数は1年生が1,082件、2年生が921件、3年生が464件、4年生が28件であった。4年生は他の学年に比べて回答者数が少ないが、2時間以上と回答した者の割合がやや多い結果となった。

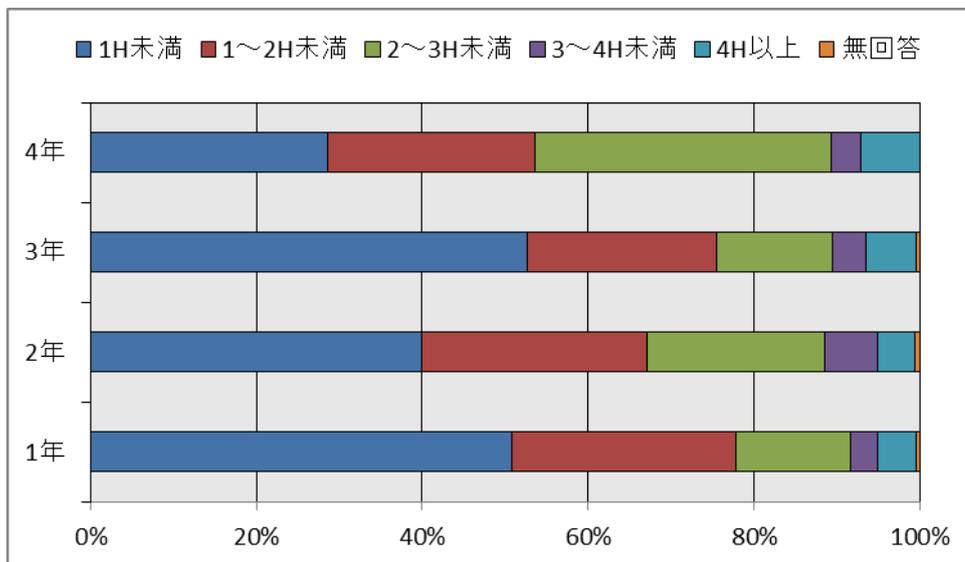


図 14 健康栄養学科の授業外での学修時間

[子ども教育学科]

図 15 は、子ども教育学科における授業外での学修時間を集計したものである。述べ回答数は、1年生が1,156件、2年生が613件、3年生が478件、4年生が6件であった。1時間未満の比率が1、3年生では60%程度、2年生では50%程度であった。

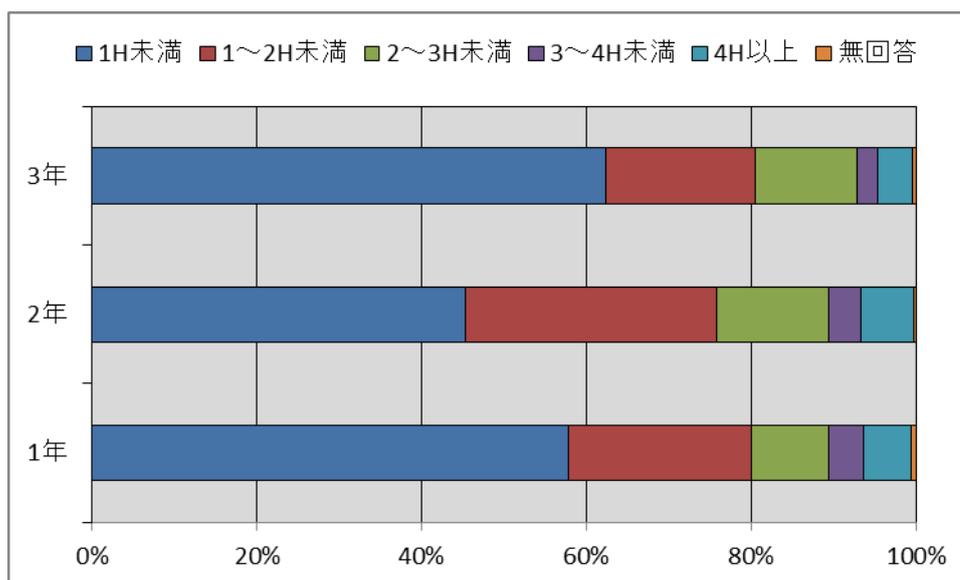


図 15 子ども教育学科の授業外での学修時間

(6) 学修行動について

[健康栄養学科]

図 16 は、健康栄養学科での学修行動について比較したものである。「授業に関して積極的に質問を行った」については、いずれの学年でも 3.0 点以下となっていた。

質問や資料収集に関しては、不要である可能性もあるが、授業で使用されるテキストや資料等、授業中の関心や疑問等を基にして、積極的に学修の視野を広げる姿勢を教授する側が意図的に伝える必要があるのかもしれない。

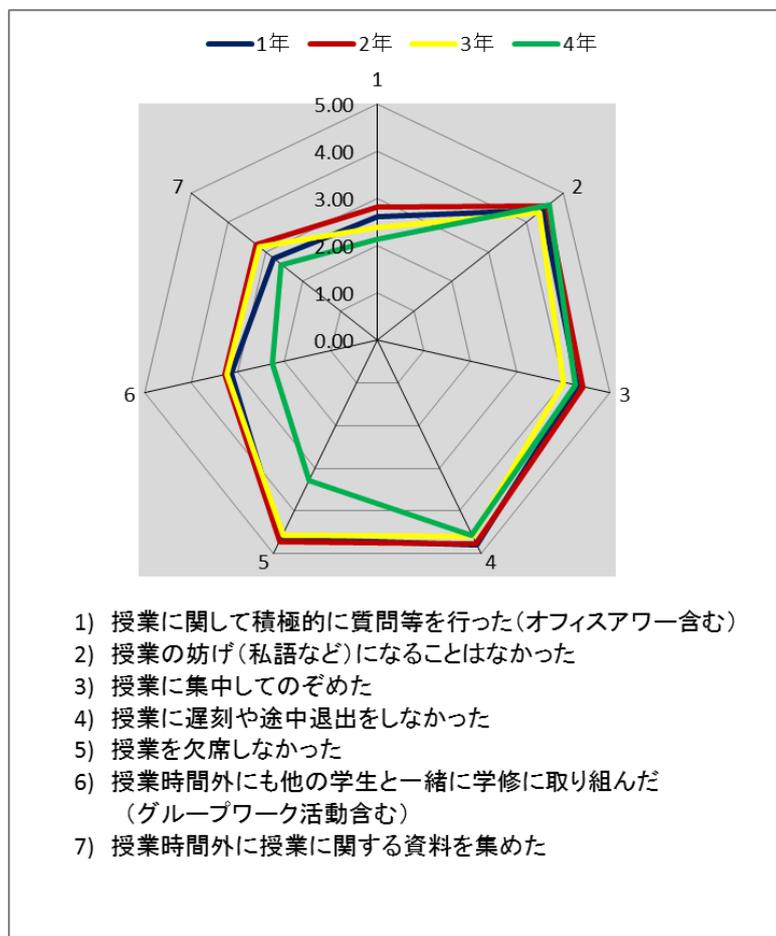


図 1 6 健康栄養学科の学修行動

[子ども教育学科]

図 17 は、子ども教育学科での学修行動について比較したものである。
いずれの項目においても、各学年で同様の傾向が認められた。

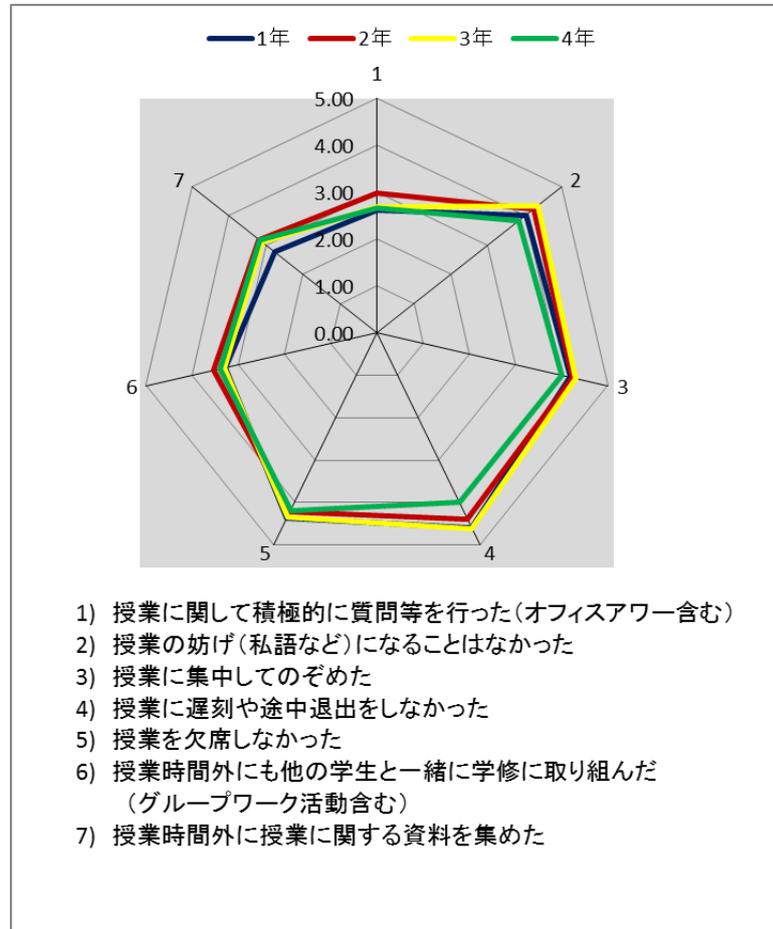


図 17 子ども教育学科の学修行動

(7) まとめ

本年度前期における人間生活学部の授業評価アンケートについて、学科や学年によっても異なるが、今後も引き続き授業内容や方法よりも学生の授業に対する意欲や関心、満足度をどのように、どこまで高めていくかがひとつの課題となる。授業内容や方法に関しては、教員側も工夫しやすく、学生側も評価しやすいだろうが、意欲や関心、満足度に関しては、学生個人の特性や主観が影響することもあり、難しい課題ともいえる。

学修活動については、質を保つためにはある程度の時間が必要だろうが、単に時間の増減だけではなく、学修の質の特性や変化を追うことができる情報収集も必要だと考えられる。また、授業外の学修については、とくに大学生に求められる学修の方法(資料収集や教員の活用等)や姿勢について、1年生のうちから意図的・具体的に伝えていく工夫が必要かもしれない。